



わたしの村をめぐる物語

2015年2月26日（木）～ 5月26日（火）

アジアギャラリー

ここで、「わたしの村」の言葉が象徴するのは「故郷」というものです。

誰もが、村であろうと街であろうと、そこへの帰属意識が強ろうと弱ろうと、「故郷」について特別な思いを持っていることでしょう。その「故郷」は、実際に自身が生まれ育った土地であったり、住んだことはなくても先祖伝来の土地であったり、場合によっては想像上の理想化された場所として探し求められる対象であったりします。「故郷」を思う／探すことは、実は、「自分はどこから来たか」「自分は何者か」というアイデンティティの確認や探求でもあり、人にとって根源的な問いの一つなのです。

ここでは、アジアの作家が描きだす故郷「わたしの村」を集めました。

【村の暮らしを描く】では、自分たちの村の暮らしや日々の仕事、あるいは理想の生活を描いた絵を、インドとバングラデシュの各民族の表現に見ていきます。

【故郷の現実】では、都市化を背景に悪質な権力者に搾取される厳しい故郷の現実などを描いた作品を紹介しています。

そして【わたしの村】の作品には、出身の村の季節や慣習や価値観が表現されており、そこに作家の故郷への愛情を感じ取っていただけるでしょう。

最後の【移動】では、移住先で自分のアイデンティティを探しもとめる作家の姿、あるいは移動民族にとって故郷は移動し続けるものであり、国境などの枠組みは絶対ではないという問いかけが垣間見られると思います。

「わたしの村」の作品をご覧くださいながら、自身の故郷へも思いはせていただければ幸いです。



▲ アウン・コー（ミャンマー）「アウン・コーの村」インクジェットプリント・紙（9枚）、2010-2011年〔部分〕

出品作品リスト（全12点）

- ▲ シャーンティ・デーヴィー（インド）
「サーワン・プージャ（7月の儀礼）」
墨、顔料・コンクリート疑似壁、1997年
- ▲ ジッヴァ・ソーマ・マーシェ（インド）
「ホーリーと村の習わし」
米汁・コンクリート疑似壁、1996年
- ▲ BRAC（バングラデシュ農村向上委員会）/
アーロン デザイン・制作（バングラデシュ）
「黄金のベンガル／壁掛け」
「農村女性の仕事／壁掛け」布に刺繍、2000年
- ▲ ヌネルシオ・アルヴァラード（フィリピン）
「シュガー・ダディ」「仮面の女王」
油彩・画布、1998年
- ▲ ブラソン・ルームアン（タイ）
「人生の重荷」グワッシュ・紙、1996年
- ▲ ソン・ヒョンスク（韓国）
「8の筆触」テンペラ・画布、1998年
「59の筆触」テンペラ・画布、1998年
「60の筆触」テンペラ・画布、2001年



▲ ザイ・クーニン（シンガポール）
「リアウ諸島」ビデオ（30分）、2003年